

# 平塚の石仏めぐり

## 26、土屋（上惣領）編



上惣領路傍 三面馬頭観音

### 土屋（上惣領）の石仏

土屋地区は平塚西部の丘陵地であり、田畑や山林を有する農業地域であります。また、土屋の歴史は古く、惣領分、庶子分、寺分といった地名が残されており、この三つが揃っているため古くから「土屋三分」と言われ、現在までその地名が残されています。

この地区は北側の台地と南側の台地との間に、西から東へと谷戸が形成され、さらにそれに沿って座禅川が流れ、県内でも有数の里山として自然や文化が色濃く残っています。

上惣領は、かつては惣領分の一部で矢沢集落でしたが、県道南金目・中井線が開通し、その後上惣領と改められたものです。その矢沢の名は「八沢」に由来するといわれ、沢の多い山間地に位置することから言われたとされています。

上惣領には42基の石仏が記録されており、造立数の多い塔のうち、多い順から馬頭観音が11基、地藏5基、巡拝塔が4基、道祖神が3基となっています。路傍に多くの馬頭観音や牛頭観音が見られるのが特徴で、これは山間部の土地柄急な坂も数多くあり、物資の運搬や農耕に馬や牛が大事な働き手であったためと思われる。またその他に、上惣領(矢沢)の富士講の人々が「浅間さん」と呼んで、年一回参拝したと言われる富士塚(石祠)や、この地区の鎮守である愛宕神社、また、古くは真言宗の寺と伝えられている天宗院など、里山に点在する石仏を訪れるのはいかがでしょうか。

### 石仏豆知識 21. 富士信仰の石造物

富士信仰は浅間信仰ともいわれます。江戸時代には庶民の間に広がり、江戸八百八講といわれるほどの多くの講ができました。教義は、神道や仏教、修験道などを織り込んだ独特のものでした。明治以降は、神仏分離のため、扶桑教や丸山教などに再編されました。富士講では吉田口が本道とされ、麓の北口本宮富士浅間神社には多くの富士講碑があります。

多くの講は、笠印と呼ばれる講紋を持っていました。分立した枝講は、親講の講紋を使い、関係を明らかにしてました。平塚市内では、丸東講と丸明講の講紋を付けた富士講碑があります。また、丸岩講があったという伝承もあります。

富士講で造立した石造物は、市内に17基現存します。地域別に見ると、土屋7基、上吉沢と高根が各3基、北金目2基、寺田縄と平塚新宿が各1基となり、土沢地区で半数を超えています。形態別に見ると、石碑11基、石祠5基、手水石1基となります。

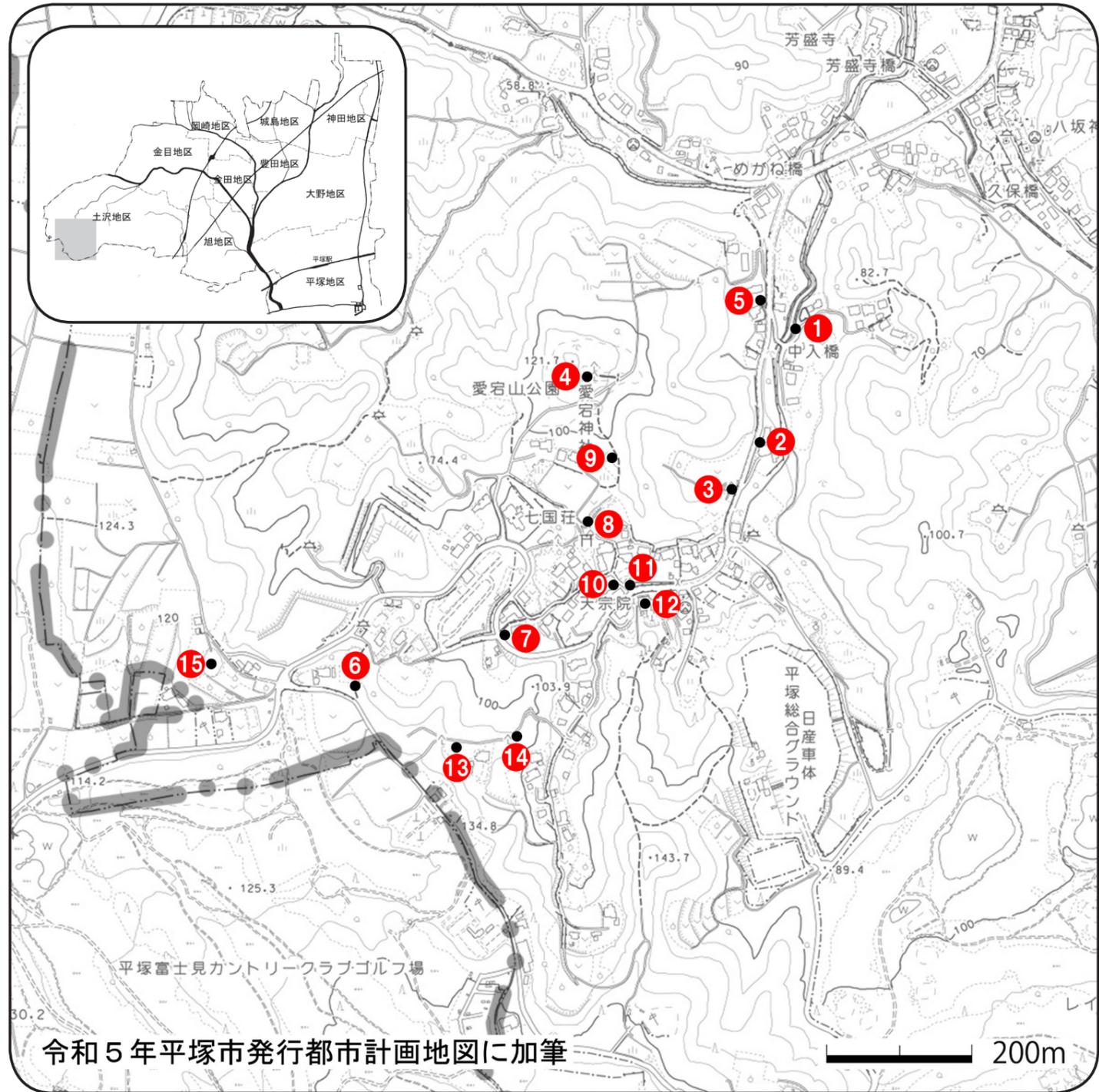
石碑のほとんどは、富士山を神格化した浅間大神、富士浅間大菩薩など神名を記した神名塔です。富士山を背にして高台に造立されることが多く、富士山を御神体とした遙拝所の意味もあります。市内の神名塔はすべて明治以降に造立されたものです。草書で大きく「浅間大神」などと彫られることが多く、土屋惣領分の八坂神社の石碑(明治23年(1890))には丸東の講紋がついています。

石祠は、富士山麓にある浅間神社の分霊を祀ったものです。市内で江戸時代に造立されたものは、大部分が石祠です。土屋上惣領の石祠(嘉永元年(1848))は、入母屋破風と趣向を凝らしたつくりで、屋根正面には丸東の講紋があります。

寺田縄の供養塔(文久2年(1862))には「登山三十三度 東口 大願成就」とあり、丸明の講紋があります。先達として33度登ると大先達の資格が得られるとされ、それを記念して奉納したものです。また、北金目神社の石碑(大正7年(1918))には「登山二百二十度」とあります。

### 土屋（上惣領）の石仏所在地と主な石仏

番号	名称	住所	主な石仏
1	土屋路傍	土屋 3928	道祖神
2	土屋路傍	土屋 3948	牛頭観音
3	土屋路傍	土屋 3950	道祖神
4	愛宕神社	土屋 3928	手水石、狛犬、石坂供養塔、秋葉社、牛頭天王
5	土屋路傍	土屋 4025	馬頭観音
6	土屋路傍	土屋 4579	牛頭観音
7	土屋路傍	土屋 4608	巡拝塔
8	土屋路傍	土屋 4634	馬頭観音
9	土屋路傍	土屋 4649	馬頭観音
10	土屋路傍	土屋 4676 西	馬頭観音
11	土屋路傍	土屋 4678	道祖神
12	天宗院	土屋 4679	巡拝塔、庚申塔、六地藏、大日如来、地藏、観音他



令和5年平塚市発行都市計画地図に加筆

番号	名称	住所	主な石仏
13	土屋路傍	土屋 4895	馬頭観音
14	土屋路傍	土屋 4901	馬頭観音、観音巡拝塔、巡拝塔
15	土屋路傍	土屋 4914	浅間社石祠

※ 当ガイドマップに記載されている石仏の基数は令和3年集計時点のものです。

石仏めぐりを行う場合の心掛け  
 石仏は、古来より多くの人々がさまざまな願いをこめて手を合わせ祈ってきたものです。今でも信仰の対象とされているものも数多くありますので、見学に当たっては、敬いの心を持って接しましょう。  
 また、お寺や神社など石仏の管理者がいらっしゃる場合は、石仏を見学する旨一声かけてから見学しましょう。

平塚の石仏めぐり(26.土屋(上惣領)編)  
 発行日: 令和7年1月  
 編集: 石仏を調べる会  
 発行: 平塚市博物館  
 住所: 神奈川県平塚市浅間町12-41  
 電話: 0463-33-5111

上惣領の道祖神 (地図番号①③⑪)

道祖神は、村や集落の出入口や辻や路傍でよく祀られています。ここ上惣領では中入、下屋、中手、中川、上屋の集落で3基の道祖神を祀っています。

①中入の道祖神 座禅川に架かる中入橋を渡り、左側の土手沿いに櫛型の文字道祖神があります。

碑正面に「道祖神 明治廿二年 一月十四日 矢沢村」(1889)と見えます。

上惣領のだんご焼きはかつて各集落ごとに行われていましたが、今ではここ中入だけで行われているそうです。

③下屋の道祖神 下屋と中入境の県道脇の崖上に、元文4年(1739)造立の古い双体道祖神が祀られています。

劣化が進んでいるため、光背がモルタルで修復されていますが、有冠袖中合掌型の双体道祖神です。

下屋地区では昔から、子どもが欲しい夫婦は1月14日にこの道祖神を持ち帰り、一晚布団の中で抱いて寝ると子宝が授かると伝えられています。

①中手、中川、上屋の道祖神 天宗院北側の県道から愛宕神社へ通ずる入り口に中手、中川、上屋の3集落で祀る双体道祖神があります。

上部が欠け下部は一部埋没していますが、烏帽子を被る神像で碑正面には「□□元辰天中□□沢村上合中」とみて取れます。

「□□元辰天」の年号は近いところで安永元年(1772)、弘化元年(1844)、明治元年(1868)が該当しますが、いずれかは不明です。また、上合中とは矢沢集落のカミ手にある中手、中川、上屋の3集落のことと思われる。



①中入の道祖神 (明治22年) ③下屋の道祖神 (元文4年) ①中手 中川 上屋の道祖神 (年代不詳)

上惣領の牛頭観音 (地図番号②⑥)

昭和20年頃から乳牛を飼う農家が多くなり、上惣領には珍しい2基の牛頭観音がいます。

一つは土屋3948坂の途中にある櫛型の塔②で、「牛頭観世音」、「昭和二十四年 二月二日小牛 三日親牛」(1949)と刻まれています。2日間で大切な牛の親子を亡くした飼主の思いが込められた供養塔です。

もう一つは土屋4579路傍の昭和54年(1979)造立の自然石型の塔⑥で飼育していた牛の供養塔です。



②牛頭観音 (昭和24年)

愛宕神社の石仏 (地図番号④)

由緒書によると、愛宕社及び秋葉社、牛頭天王社は天正3年(1575)の頃より矢沢(上惣領)の鎮守としてあったそうです。御祭神は火産之命で、明治45年(1912)に一時熊野神社に合祀されましたが、戦後に再び分祀され、昭和27年(1952)に再建され現在に至ったとあります。

ここで紹介する石祠のほかに狛犬、手水石、石坂供養塔、奉納塔などが点在しています。

2基の石祠 本殿右側にある石祠は秋葉社を祀っており、文化6年(1809)に矢沢村の人々が造立したもので、石祠内の棟札には「奉齋秋葉社 火 雷 命 御神璽」とあり、火の神様で火伏せの神でもあります。

左側の石祠は牛頭天王を祀っており、紀年銘はありませんが石祠内の棟札には「奉齋牛頭天王社御神璽」とあり、疫病を防ぐ神として信仰されています。



牛頭天王社(年代不詳) 秋葉社(文化6年)

土屋4608路傍の巡拝塔 (地図番号⑦)

塔正面の月山・湯殿山・羽黒山を出羽三山といい、中でも湯殿山を総奥の院として三山の上位に位置付け、湯殿山を大きく中央に配しています。側面には「願主 石黒平兵衛」、「文化五年」(1808)と刻まれ、出羽三山の参拝と観音霊場巡りを無事終えた記念に造立されています。

百番供養とあるのは観音霊場(西国33・坂東33・秩父34)のことです。百番観音も兼ねた巡拝塔で、平塚市内には8基あります。



巡拝塔(文化5年)

天宗院の石仏(1) (地図番号⑩)

八沢山天宗院東円寺と号し古くは真言宗でしたが、正保4年(1647)に天台宗に改宗しました。本尊は阿彌陀如来です。戦国時代末期、武田氏の遺臣がこの地に弥陀薬師堂を建てたのが始まりと伝わっています。

巡拝塔 山門の手前右側に巡拝塔と庚申塔が並んでいます。

巡拝塔は文化14年(1817)の造立で「百番観世音供養塔」の銘があります。

百番観音供養は、西国・坂東・秩父の観音霊場100ヶ所の巡拝成就を記



巡拝塔(文化14年)

天宗院の石仏(2) (地図番号⑫)

念して造立されます。造立に巡拝者の名前が彫られていることが多く、この巡拝塔では施主名が観音講となっていることから、塔を造立することにより、観音霊場巡拝と同じ功德を願ったものとも考えられます。

庚申塔 笠付型の三猿塔で、元禄11年(1698)の造立。正面には「奉造立庚申供養二世安楽祈所」の銘があり、三面に三猿が配置されています。

平塚市内では初期の形態になります。全体的に傷みが激しく、右面・左面はかろうじて不見猿・不聞猿と分かりますが、正面の猿は欠けて痕跡を残すだけになっています。

土屋地区には17基の庚申塔がありますが、ほとんどが大寺分と大庶子分であり、惣領分には2基、上惣領にはこの1基しかありません。

六地藏 山門の手前左側には石仏が並んでいます。前列は六地藏で、昭和60年(1985)の造立です。

添碑には、釈迦と阿彌陀2尊の教えに導かれて、広く浄土の門を開こうという意味の言葉が彫られています。

六地藏造立の作善と釈迦如来・阿彌陀如来の教えに従うことにより、浄土の門が開かれることを願っています。

地藏など6基の石仏 後列にも6体の石仏が並んでいます。

右端は地藏尊立像で、「元禄五申天」(1692)の銘があります。その左は無銘の地藏尊立像が2基。次は未敷蓮華を持つ聖観音で、頭部はモルタルで修復されています。次いで「秋山金蔵」の銘がある地藏尊立像で、蓮華座がありません。最後は金剛界大日如来坐像と続きます。



庚申塔(元禄11年)



六地藏(昭和60年)



地藏他(元禄5年他)

土屋4895路傍の馬頭観音 (地図番号⑬)

浅間坂を下っていくと、道路脇に市内では数少ない憤怒相をした三面馬頭観音が刻まれた塔が建っています。この塔は文化13年(1816)に建立されたもので、右面には「馬頭観世音供養塔」とあります。

地区長老の話によれば、以前この地方では馬や牛が運搬や農耕として役立っており、特に山間部では急な細い道が多く、時には牛馬と共に谷底に落ち、引き揚げるのに大変苦労したとのこと。



馬頭観音(文化13年)

土屋4901路傍の石仏 (地図番号⑭)

土屋橋から県道の中井町に向かう途中のゴルフ場入口を左に入り、道なりに進むと左に入る細い道(浅間坂)があり、三面馬頭観音を過ぎ、その先の小屋掛けの中に百番巡拝塔、如意輪観音、その横に馬頭観音が祀られています。

巡拝塔 高さ1m弱の丸い自然石の塔正面に、聖観音の種字「サ」百番供養「享和元辛酉年二月吉日 石黒長兵衛」(1801)とあります。

百観音巡りとは江戸時代後期に庶民の間に広まり、西国・坂東・秩父の観音霊場100ヶ所を巡ることで、この塔は100ヶ所の巡礼を成就したことを記念して建てられたものです。

観音巡拝塔 兜巾型の正面をくり抜いた中に、頭に烏帽子のようなものを乗せ蓮の花の上に右ひざを立てて座り、右手を頬にあて人の世の来し方、行く末を案じ物思いにふける半跏思惟の姿が彫られています。

塔右側面に「奉順禮観世音菩薩」、左側面に「文化八辛未三月吉日」(1811)、台石正面に「石黒孫右衛門」とあります。

馬頭観音 小屋の横にある高さ40cm余りの塔です。正面の上部を四角く囲みユーモラスな馬の顔が浮き彫りされ、その下に「馬頭観世音」、右に「明治二己年」(1869)、左に「正月二十八日」と彫られています。左側面に「施主 紋左工門」とあり家族同然にかわいがっていた愛馬とともにこの道を通っていたのでしょうか。

馬の顔が彫られた文字塔は南金目にもあります。



巡拝塔(享和元年)



観音巡拝塔(文化8年)



馬頭観音(明治2年)

土屋4914路傍の浅間社石祠 (地図番号⑮)

「浅間さん」と呼ばれている石祠は富士山を背に東向きに祀られています。

入母屋破風屋根の正面に富士講の講紋(丸に東)。祠前面に「天下泰平[五穀]成就 村中[安]全」の祈願や、裏面には富士山の絵と詩が詠まれ、側面には「講中」「土屋八沢村」「嘉永元年」(1848)や登拝した講員名が刻まれています。

矢沢地区の富士講は、年1回この浅間社の石祠に参拝したといわれています。



浅間大神(嘉永元年)